全カリ Newsletter No. 29
2011.3.1
立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

インテンシブコース（副専攻）第一号修了者

インテンシブコース（副専攻）を履修して

法学部法学科3年次　柳　真利奈

まず、第一号と数字が振られたインテンシブコース修了証を手にすることが出来たことを、心より嬉しく思っています。

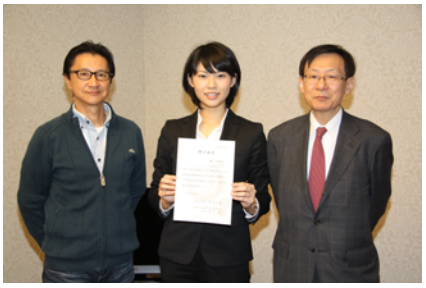
私は、インテンシブコース（副専攻）が認められるということは１年次生の頃から履修要項を見て知ってはいましたが、それを目的に授業を履修した訳ではありませんでした。英語必修科目を履修した後も英語科目を履修し続けたのは、英語を話す環境を出来る限り多くつくるという目的と、１年次に私に大きく影響を与えて下さった先生の授業を受け続けたいという想いからでした。

１年次には週４回の英語の必修のクラスがあり、私のクラスはディスカッションやディベートを多く行い、話さなければ評価されないという環境でした。また、集まってきた学生達も英語を話すことに非常に積極的で、全てにおいて意欲的な人達が集まる環境も、私にとって大きな刺激でした。このようなクラスで学んだ内容は、まさに「答えの無い問題」。Global Issue や Culture 等から、一つのテーマに対してそれぞれの主張をぶつけ合う中で、私が何よりも悔しかったことは、英語を思うように話せないということよりも、日本語でさえも自分の主張を明確に持てていないことでした。その悔しさを感じてから、事前にテーマを調べ、それに対する意見をまとめてから授業に出席する様になりました。以前は尻込みしていた発言も、単語が分からなくても、文法が崩れていても、とにかく積極的にする様になりました。先生は、私の拙い英語でもその努力を認め、どんな意見であっても穏やかに受け入れて下さいました。そのことが、英語をもっと話せるようになりたいという強いモチベーションに繋がっていきました。また、先生は、授業外でもオフィスアワーを使って私達の話に親身に耳を傾け、英語を話す時間を最大限に与えて下さり、その際に話した私達の夢に対して視座を与えてくれたり、参考になる文献等を渡してくれたりと、強く応援をして下さいました。１年次のこの経験は、受験勉強といった解答がある問題に対する勉強しかしてこなかった私に衝撃を与え、私が描く夢や、それを実現するためのビジョンに大きく影響を与えています。

２年次になった時も、この先生の授業を受け続けたい、そして英語を話し続けたいと思い、１年次にお世話になった先生が担当する自由選択科目を履修しました。その際にとても印象に残った授業がアフリカの学生との文通でした。その際に先生が仰った、「この手紙の文章によっては相手にショックを与えてしまう。とても慎重に書かなければいけない。とても難しいけれど。」という言葉の通り、インターネット環境もない国の人に対して、日本では当たり前のように溢れている高機能の電子製品の話をしたり、宗教や政治に関して配慮なく述べたりすることは、相手が今感じている幸せに疑問を持たせてしまい、傷つけてしまう可能性もあります。受け取った相手が喜んでくれる手紙とはどんなものだろうと考えながら、日本の文化や四季の美しさ、私が学んでいることや、描いている夢について、自分の手で丁寧に書きました。どんな反応がくるかと不安も含めどきどきしていました。約１カ月後に、先生を経由して私に届いたアフリカからの手紙は、日本の紙質とは違う封筒に包まれ、紙１枚にびっしりと英語が書かれたものでした。「Dear my friend, Marina. I wish to visit one day」という文章から始まり、手描きの花の絵が添えられた手紙を見た時、感動と共に、遠く離れた異国をとても近くに感じました。その後も数回授業を通じて文通をし、お互い国の文化等の話を深めていきました。

この授業では、英語を如何に上手く使うかということよりも、英語を通じて広がる世界と、そこでの人と理解し合うための姿勢を教えて頂いた様に思います。TOEIC の点数は一人で努力すれば上がります。しかし、これらのことは、一人では絶対に学べないことだと思います。私の後輩たちにも、インテンシブコース（副専攻）を最終目的とする必要は無いと思いますが、必修で終わりにせずにコンスタントに英語で想いを伝える機会を作って欲しいと思います。そして、私は大学を卒業しても、履修した英語の授業で学んだ姿勢を忘れず、様々な国の人と共に仕事をしていこうと思います。

最後に、今までお世話になった英語の先生方に、この場を借りてお礼を述べさせて頂きたいと思います。ありがとうございました。



【修了証授与式にて】　（左上写真：柳さん、　右下写真：左　谷野言語チームリーダー、中央　柳さん、右　青木全カリ部長）

目 次

インテンシブコース（副専攻）修了者第一号 …… 柳 真利奈（1）
2010 年度全カリ海外言語文化研修報告 …… （2）
ドイツ語海外言語文化研修 …… 菅野智成／浜崎桂子（2）
フランス語海外言語文化研修 …… 今村友規子／石川文也（3）
スペイン語海外言語文化研修 …… 三苫よしみ／佐藤邦彦（4）
2012 年度総合教育科目改革に向けて …… 下地秀樹、岩崎俊夫、小池靖、沼澤秀雄、上田恵介（5）
2010 年度全学共通カリキュラム運営センターの主な活動 …… （7）

2010 年度全カリ海外言語文化研修報告

2010 年度よりこれまで開講されていた英語・中国語・朝鮮語に加えて、新たにドイツ語・フランス語・スペイン語で海外言語文化研修が開講された。以下では、新規開講された 3 言語の海外研修に参加した学生および科目担当者の報告を行う。

【ドイツ語海外言語文化研修】

ドイツ語海外言語文化研修の日々

理学部化学科３年次　菅野　智成

このドイツ語研修は、自分の人生を前に進めるきっかけとなりました。日本と違う文化、言語、環境、その他多くのものが、自分の考え方や生き方を変えてくれました。ドイツで過ごした日々の１日１日は日本の１日より長く、しかし今全てを振り返ってみれば１日もたっていないような気がします。今まで三日坊主で終わっていた日記も、研修中はそのページの端まで、毎日の出来事を書いていました。そんなドイツでの研修で自分が身につけたこと、感じたことを紹介したいと思います。

まず、研修中は大学の寮で過ごします。今まで実家暮らしだった自分にとって、これが初めての一人暮らしとなりました。ドイツの寮での生活は、正直楽なものではありませんでした。日本と違い、周りに 24 時間営業の店はありませんし、寮自体も設備が整っているわけではありません。研修期間中は、寮の近くにあるスーパーの一時休業、工事による交通機関のシャットダウン、寮のエレベーターの停止など多くのトラブルが毎日のように起こりました。これらが起こるたびに各自で対策をとり、ときには友人と協力していかなければなりませんでした。おかげで、どんなトラブルが目の前にあっても、臨機応変に対応できる能力がつきました。同時に不便が人を豊かにしてくれると感じました。不便であれば頭を使い、他の人と協力したりして、その状況を打破しようとしますが、逆に不便がなければ人は頭を使わないうえ、他人とふれあうこともありません。便利さを享受しつくしている今の日本のあり方に疑問を持ちました。

次に、大学でのドイツ語の授業です。ここではドイツ人教員のドイツ語によるドイツ語の授業が行われます。まず授業で教員が言っていることを理解しなければ、授業の内容が分かるはずもありません。また、その場にいるのは教員だけではありません。もちろん各国からの参加者がいます。ドイツ語はもちろんのこと、相手を深く知るために、英語や中国語、ジェスチャーまで、あらゆる手段を使う必要がありました。初めのうちは苦難の連続でしたが、このような環境が自分のコミュニケーション能力を大きく伸ばしてくれました。語学力だけでなく、異文化の中にいる人に対しての姿勢まで変えてくれました。同時に、たとえ言語が違っていても、友人になることは簡単だなと感じました。

最後に、週末の自由行動です。週末は授業がないので、自分の好きなように旅をすることができます。授業で習ったドイツ語を駆使して、ドイツ国内はもちろん、隣国まで行くことができます。自由に回ってみることで、様々な状況でのドイツ語に触れられるだけでなく、宿泊施設、レストランの予約など、海外生活で必要なスキルを数多く身につけることができました。今では、たとえ世界のどこへ行ったとしても、生きていける自信を持っています。

研修で身につけたことは語りきれません。起きたハプニングの１つ１つが自分の糧になっています。もし願いが叶うとするなら、もう一度また、あの空飛ぶような日々に帰りたいと思うばかりです。

（ライプツィヒ大学ヘルダーインスティトゥート棟）

ドイツ語海外言語文化研修活動報告

異文化コミュニケーション学部准教授　浜崎　桂子

ドイツ語海外言語文化研修では、2 年次生から 4 年次生までの 20 名が、ライプツィヒ大学ヘルダー研究所・財団法人インターダフが開講する 3 週間半のサマーコースに参加した。4 回の事前研修で万全な準備を行うことは難しかったが、旅行手続や現地情報の説明のほか、現地の授業に備えてのドイツ語表現練習を中心に授業を行った。海外が初めてという学生も多く当初は不安が大きいようであったが、グループワークを重ねるうちに学生同士も徐々に打ち解け、リーダーシップを発揮する学生も出て、出発するまでには互いに助け合う雰囲気ができていたように思う。

現地では、（日本の大学の夏季休暇の時期であるため、日本人学生が大半を占めていたとはいえ）各国から集まった参加者たちと一緒に、各自のレベルに合った 10 人程度のクラスで授業を受けた。最初こそとまどいながらも、現地の先生方の丁寧なご指導のもと、学生たちは、確実に実力の伸びとドイツ語を使う楽しさを実感したようである。コース最後に行われたグループごとのプレゼンテーションでは、街の人にインタビューを行うなど、実際にドイツ語を使いながら仲間と協力して発表を成功させ、大きな達成感を得たと、ある学生は報告してくれた。授業外のプログラムでも、サッカーやボウリングに興じてチューターのドイツ人学生や他の参加者と交流したり、ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏やジャズ・コンサートを聴く機会を得たり、ベルリンやドレスデンへの遠足に出かけて街の歴史に触れるなど、現地でしか体験することのできない「ドイツ」を満喫してきたようである。第 1 回目の開講ということもあって細かな情報が十分でない点もあり、現地の学生寮での生活や交通事情にとまどった学生もいたようではあるが、事故や不測の事態なく、20 名の学生が有意義な研修を行うことができた。関係各位に感謝したい。

ドイツ語海外言語文化研修：2010年8月4日～8月30日

【フランス語海外言語文化研修】

フランス語海外言語文化研修に参加して

現代心理学部映像身体学科４年次　今村　友規子

私はフランスでの研修の中で、常に一貫した目標がありました。それは「自分で考え、自分で行動する」ということです。他の日本人に頼らず、英語に頼らず、自分1人でどこまでできるかを試したい。今考えると、私はフランスという国そのものに強く惹かれていたわけではありませんでした。学生生活最後に与えられたこのチャンスで自分自身の限界に挑戦してみるという事が、私の留学の最大の目的だったのだと思います。

私はホームステイを希望したので、ディジョンでの3週間はもう一人の立教生の中西さんと一緒にフランスの家庭で過ごしました。最初に駅に迎えに来てくれたのは、ジネットさんというフランス人のかわいらしいおばあさんでした。10 日程はジネットさんと中西さんの 3 人で過ごし、その後はジネットさんの娘さんのフレデリックさんとその恋人のマークさんと 5 人で過ごしました。3人は話す速度がとても速く、古い言葉も使うので聞きとるのが大変でした。ジネットさんは心優しく、毎日特別料理のようなおいしい夕食を用意してくれて、発音の勉強も手伝ってくれたり、パーティを開いてくれたり、私達を様々な方法で歓迎してくれました。偶然にもフレデリックさんは歌手だったので、私達が歌声を聴きたいと言うと、いつもピアノの弾き語りで小さなコンサートをしてくれました。あの歌声を私はいつまでも忘れないと思います。毎日夢のように素晴らしい経験をさせて頂きました。そして何よりも、3人が本当にあたたかい愛情を私と中西さんに惜しみなく注いでくれたことを心の底から感謝しています。

語学学校での授業はついていくのがやっとでした。クラスでは日本人が 15 人近くおり、授業中も日本語が聞こえることが多くて集中しづらい環境でした。他のクラスでは日本人が1人きりだったり、逆に1クラス自体の人数が5人程だったり、かなり差があったようです。最初の 1 週間は先生の言っていることが全く理解できなかったのですが、毎晩復習を行った結果、2週目からは先生の話に反応できるようになっていきました。クラスを下げてもらうことも可能だったのですが、あえて変更をせずに必死になって勉強してよかったと思っています。

語学研修を終えてからのパリ滞在はとても有意義なものでした。毎日ほとんど1人で行動をしていたので、たくさんのフランス人が助けてくれました。もちろん1人での行動は少なからず危険を伴いましたが、お店の人が話しかけてくれたり、予期せぬ場所で友達ができたりと、心躍る経験がたくさんできました。そのおかげで、ディジョンの滞在中と同じくらいフランス語の会話の勉強ができたと感じています。

（ホストファミリーと今村さん（左端）、中西さん）

今回の研修で自分自身を追い込み限界に挑戦したことで少しだけ自分に自信がついた気がします。でもそれは私1人の力で成し遂げられたことではなく、多くの心優しいフランス人と志を同じくした友人に助けられたからだと思っています。研修を終えた今、フランスには言語を超えた魅力がぎっしり詰まっていると強く感じるようになりました。これからも日本で勉強を続け、精進し、いつかの次のチャンスに備えたいと考えています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2010 年度フランス語海外言語文化研修についての所見

異文化コミュニケーション学部教授　石川　文也

「フランス語海外言語文化研修」は、3回の事前研修（4月17日（土）、5月8日（土）、6月12日（土））と約3週間の留学研修（8月1日（日）～8月22日（日）（フランス出発：21日（土））を正規のプログラムとして開催された。研修機関はブルゴーニュ大学付属国際フランス学センター（CIEF）である。さらに、希望者のみを対象としたものとしてパリ自由滞在プログラム（8月21日（土）～8月28日（土）（日本到着：29日（日））も実施された。CIEF でおこなわれる授業内容に関する情報の事前入手および CIEF で取得した学生の成績の連絡手続き、航空券の手配と現地における研修地への移動、研修期間中の滞在先の決定などについては、(財）日仏文化協会の協力を得て進められた。

「フランス語海外言語文化研修」を初めての試みとしておこなうに際して、フランス語教育研究室は早い段階から日仏文化協会と打ち合わせを重ねた。特に事前研修では、学生に対して、現地において事故・トラブルなどに巻き込まれないように現地の環境・生活に関する必要な情報を提供するとともに、生活環境が変わることに対して十全な心構えをさせることを心がけた。事前研修がそのように現地での研修と同程度に重要であることをまず第 1 回目の事前研修時に学生に周知するようにしたが、その周知がほぼ期待していた程度に徹底できていたことは第2・3回目の事前研修で欠席者がいなかったこと、そして何よりも現地において学生が大きな事故・トラブルなどに巻き込まれなかったことが物語っていると言えよう。さらに、研修そのものについてもそれが学生にとって非常に意味のあるものであったことは、数名の学生から帰国後に受けた任意の報告に記されていた。さらに、報告書の提出を義務づけたパリ自由滞在プログラムの参加者からは、この研修全体がフランス語とフランス語圏に対する更なる興味を掻き立てられる契機となったこと、研修で得たことを大学における今後の勉強に繋げたいと考えるようになったこと、また大学卒業後の生き方について研修を通じて真剣に考えるようになったことなどが報告された。これらの報告からは、「フランス語海外言語文化研修」は、単にフランス語のスキルの向上あるいは文化への接触を実現するための場としてではなく、学生が自発的に自己について問を発する場としても大きな意味を持っていたことを読み取ることができる。その意味において、この「フランス語海外言語文化研修」は、大学教育の根源を形成する要素のひとつである「自己の相対化」を学生に経験させる貴重な機会となり得たと言えよう。

【スペイン語海外言語文化研修】

スペイン語海外言語文化研修に参加して

コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科２年次　三苫 よしみ

私はこの研修で、言語や歴史だけでなく、沢山の温かいものを学ぶことができました。また同時に、ヨーロッパの国がもつ日本人に対しての印象をも身を持って体験しました。それはどちらも、現地に赴きスペインの人々の心に触れられたことによって得た、私にとってのかけがえのない財産といえます。

この研修は「語学学習」「スペインでの生活」「観光」の３つが軸になっています。まず、「語学学習」についてですが、この授業はネイティブの先生方によって１日に２時間×2コマを週５日×2週間、文法と会話にわけて行われます。この授業で最も印象に残るのは、おそらく先生方の授業の方法でしょう。テンションや質問の仕方までもが、日本の学生である私たちには良い刺激になり、一言で言うとすれば「テンポが良い」です。授業の主役は学生であり、その学生達から反応がなければ、もっと質問を明確に、単純にして答えを促す、そのような方法で授業は進められました。2 人の先生のうち 1 人の会話の先生は「辞書は使わずに」というのが口癖で、それは無茶なこととも思えますが、その指示を守ることの大切さは、言語を感覚的に覚えられたという事実で十分に理解できました。

次に「スペインでの生活」を振り返ってみます。私たちの場合は、一家庭に一人が割り当てられホームステイをしました。一般家庭に滞在させてもらうと、最初はどうしても「来客」という色が強くなりがちですが、スペインの方々の人柄のおかげで、すぐに家族の一員としての暮らしを始めることができました。はじめのうちは、現地の生活リズムを学ぶために行動を共にすることが多かったのですが、2、3日経てばすぐに、実の子供のように、1人で学校へ通うようになりました。また、学校は午前中だけだったので、お昼をホストファミリーと一緒に食べた後は、シエスタというスペイン特有の昼寝で体を休ませ、そして自分の好きな行動をとることができました。バスやコンビニは、日本にいるときと同じように利用していましたが、そのような日常の中に起こる様々な出来事が、スペインでの自分の未熟さや成長をひしひしと感じさせてくれ、また、適度な距離で私たちをサポートしてくれるホストファミリーの存在は、異国の地で生活している私たちを安心させてくれるものとなりました。

「観光」については、オプショナルツアーが充実していたおかげで、闘牛やサッカー観戦、フラメンコ鑑賞、セゴビアの水道橋やディズニー映画のモデルとなったお城巡りなど、スペインの文化に存分に触れることができました。また、私たちの滞在したアルカラ＝デ＝エナレスという町は、中心街が世界遺産に認定されているため、オプショナルツアーがない日などに家の周りを散歩するだけでも、世界遺産の美しい町並みを肌で感じることができました。

最後に、日本とスペインという対照的な国の者同士が共に生活することは、決してどちらか一方の国では味わえないような、すごく意味のある経験だと思います。そのような環境に自分の身を置くことこそが、この研修の醍醐味といえるかもしれません。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

スペイン語海外言語文化研修報告

異文化コミュニケーション学部教授　佐藤　邦彦

2010 年度スペイン語海外言語文化研修（2010 年 8 月 20 日～9 月 6 日）には 7 名の学生が参加し、全員無事に帰国した。派遣先はスペインのアルカラ＝デ＝エナレス(Alcalá de Henares)大学シスネロス(Cisneros)校。アルカラ＝デ＝エナレスは、その中心街が世界遺産に登録されていて、首都マドリードやその近郊の文化遺産の所在地とのアクセスもよく、スペイン文化を学ぶには格好の環境である。アルカラ大学も以前から外国人向きのスペイン語研修に力を入れていて、定評がある。

正確にはアルカラ大学と、旅行会社 H.I.S、スペイン留学のサポートを専門とする日西協会が協同で「夏季スペイン語セミナー」を運営しており、旅行の手続きと現地でのサポートも込みで委託できる上に、交渉や手続きを比較的楽に進めることが出来て幸運であった。（ただし、大学―業者間の契約やお金のやり取り等の段階では色々複雑な問題があり、全カリ事務室の方に随分ご負担をおかけした。ここに記して謝意を表したい）。

細かい事を言うと、ステイ先のホストとの間でコミュニケーション上のすれ違いが起こって、日西協会のスタッフがなんとか執り成す、というケースもあったようだ。図らずも丁寧なサポートぶりを知ることができたとも言えるが、今後は、スペイン人的なコミュニケーションのあり方のような点も含めて、事前研修の内容を充実していきたいと思う。

参加学生全員が、前期の事前研修の段階から積極的な姿勢を示していた。その一部は国際センターの派遣留学にもチャレンジしており、スペイン語を教える者としては嬉しい限りである。今回の海外言語文化研修に参加した学生達が、そこで得たものを今後も活かし、積極的に勉強を続けてくれることを心から願う。

今回が初の試みだったので、7 名という参加者数を意外に多いと見るべきか、少ないと見るべきかは分からないが、来年度以降も学生達が積極的に参加してくれることを望むと同時に、教員側もより良い指導を目指して頑張りたいと思う。

－2012 年度総合教育科目改革に向けて－

2012 年度全カリ改革に向けて－立教科目群の編成

学校・社会教育講座教授　下地　秀樹

現在の「立教科目（R 科目）」は、全カリの硬直化を避けるアイディアとして、2001 年度から「時事科目（T 科目）」とともに開講されている。「建学の精神」が問いかける「人間としての基本的なあり方」を学び、考え、行動へと誘うこの科目群は、2005 年度には文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に採択され、内外の注目を集めることにもなった。以来、当初の「宗教」「都市」「大学」「人権」というテーマに、「環境」「平和」「いのち」「ウエルネス」が加わり、「他者との共生」をキーワードとするこれら "8" つのテーマで展開され、今日に至っている。ところが、全カリ発足よりこれに内在する「絶えざる点検・評価」は、その「第二ステージ」を要請し、2008 年度の「学士課程教育検討グループ」、翌 2009 年度の本チーム（総合教育科目構想・運営チーム）による「全カリ総合教育 2012 年度改革」の検討において、「立教科目」には「建学の精神」および「自校教育」との関連のいっそうの明確化が求められることとなり、テーマの絞り込みが必至となった。

今年度（2010 年度）の本チームは、以上の経過を踏まえ、テーマの絞り込みと科目設定の趣旨・目的を明記するガイドラインの策定に傾注してきた。以下のような案を考えている。「建学の精神」を示す標語は“Pro Deo et Patria”であるが、その内実はむしろ構成メンバーがともに問い続けるものと解釈し、設定趣旨を「本学の建学理念を温ね、私立大学として今日まで果たしてきた社会的役割を辿るとともに、今後も社会のなかで多様な人々と繋がりながら歩んでいくための課題を、担当教員と受講学生がともに探求する科目」、目標を「本学で学ぶ意味を追求しながら、立教生としてのアイデンティティと教養の核心を掴むこと」とする。テーマは「宗教」「人権」「大学」に絞り、それぞれ 32、28、20 コマ、計 80 コマ開講し、充実化する。このなかに、「都市」や「平和」等で展開されてきた科目内容をある程度盛り込むことを考慮しながら、総合教育科目の他のカテゴリー（領域別科目群や主題別科目群）との兼ね合いのなかで、具体的な科目編成を目下検討している。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

トンネルを抜けて、いま

経済学部教授　岩崎　俊夫

2012 年度全学共通カリキュラム改革は約 2 年の議論の結果、一条の光が漸く見えてきた。思えば長いトンネルであった。

改革の前提は、「2010 年度全カリ総合教育検討グループ答申」（2008 年 1 月）と「学士課程教育検討グループ答申」（2008 年 12 月）に盛り込まれた総合カリキュラムの新たな視点（学士課程での学生の能力育成、学部提供科目の新設、クラスサイズの適正化など）であった。当初、総合カリキュラムの抜本的改革（例えばシークエンスの導入を含めたカリキュラム体系の大幅な改編）もありうると考えていたが、議論を経て、現時点では全カリ委員会で了承された「全カリ総合教育科目・2012 年度カリキュラム案」（2010 年 3 月）の内容と、その実施上の指針「全カリ総合 2012 年度カリキュラム・最終案策定作業中間報告」（2010 年 12 月）の提案、要請に落ち着いた。

トンネル通過中の列車では、今日の学生の資質と彼らの将来像が話題になった。総合チームでは、改革検討に先だち 2009 年春にメンバーによるプレゼンが行なわれ、そこでの議論の内容とその後の検討に引き継がれたものは、現在の学生の資質の把握、また巣立っていく将来社会を担える人間像の展望、その議論の延長で全カリ教育の構想といった諸点であった。

改革の大きな柱は、①それぞれの学部に所属する学生が履修する他学部の学問的特性を反映した専門基礎科目群（ディシプリン科目群）と、②古典的（ないしそれを要約した）文献の「読み」をとおした思考力と表現力の向上に重きをおく科目群の設置である。これらは、メンバーの各自がそれらの科目担当者になったと仮定し、シラバス試案作成作業の模索の過程から出てきた科目体系の柱である。

現在、各学部に学部提供科目の依頼を行い、現行「総合 A」の見直しと仕分け、体系全体の構築に取り組んでいる。本年度末には、具体的科目名称が入った新全カリ総合科目体系（案）を示すことができるだろう。事務局と連携し、作業に邁進している。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

全カリでディシプリンを学ぶ

社会学部准教授　小池　靖

全学共通カリキュラムは、全学部の、何年次の学生に対しても開かれており、大学レベルの教養教育の基礎となる部分です。

そんな全カリが、いくつかの学部より選ばれた教員によって、言わば寄り合い所帯のかたちで管理・運営されているということは知りませんでした。私は、2010 年度より全カリ・総合チームメンバーに加えていただきました。

その全カリ・総合チームでは、現在 2012 年度の改革に向けて、毎週のように会議をおこない、アイディアを出し合い、各所に調整に出向いている状況にあります。

さて、全カリ科目においては、各教員は自分の専門を必ずしも語らなくてよく、入門的な授業が多くなるという傾向は確かに存在していました。しかし、今回の改革の目玉となるもののひとつに、「領域別科目群」（仮称）があります。これは、各学部より、自学部生履修不可という条件のもと、他学部の学生に

対し、多少なりともその学部のディシプリンを感じさせるような科目を提供していただく、というものです。社会学部にあてはめて言えば、「他学部生のための社会学講義」「他学部生のための社会学文献講読」を、全カリというワクのなかでおこなうわけです。

これはおそらく、教養教育プログラムとしては全国的にも珍しいものでしょう。もちろん「やってみなければわからない」という面があることは否定しません。しかし、各学部にお願いして導入する以上、「改革のための改革」にはならないよう、各コマの設置、運営に至るまでキチンと見届けたいと考えています。この領域別科目群は、たとえば第2希望以下の学部・学科に入学したといった学生にも、学びたかった分野を部分的に学べる機会にもなると個人的には予測しています。

その他、従来の総合A科目の再編にも着手しており、従来手薄であったテーマの拡充なども検討しています。具体的には、「ポピュラーカルチャー論」なども検討されているところです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2012年度全カリ改革に向けて
－総合教育科目「心身への着目」－

コミュニティ福祉学部教授　沼澤　秀雄

総合教育科目「心身への着目」のカテゴリーにおける2012年度以降の変更のポイントは、大まかにいって、心理学系とスポーツ・健康科学系の科目群に統一することである。これまでは「支え合いの諸相」、「自然環境と人間」といった福祉、自然科学領域の科目が一部含まれていたが、学部講義系科目や、他のカテゴリーに移動することによって整理を行った。この科目群の特徴のひとつは、学生による授業評価アンケートにおいて総じて高評価が出ている科目であるということである。その評価内容をみてみると、成績評価が甘いといった、俗に言う「楽勝科目」だからではないようで、「総合的にみてこの授業は･･･」の4項目について全て他の総合Aカテゴリーよりも高得点であった。このように「心身への着目」の科目群は担当教員の努力と工夫によって、大人数のクラスであっても学生の満足度は高い授業として定着している。

一方で、この科目カテゴリーは2005年度に文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択された立教科目－建学の精神から学ぶ科目展開－のなかの8つのテーマのなかでウエルネスに関わる科目群が含まれる。この立教科目のテーマを「身体」、「健康」や「スポーツ」としなかったのは、現代人の豊かな生き方を考えたときに、「心」と「身体」の健康、「心身の健康」が重要であるとの認識があったからである。これは片方が充実しているだけでは十分でなく両方が良好な状態でなければならないものなのである。2012年度以降についても「人間としての基本的なあり方」や「他者との共生」を共通理念としてウエルネスをキーワードにしながら、この科目群を構成していきたい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

学生に本（古典）を読ませよう
－領域別B（文献系）科目と理学部－

理学部教授　上田　恵介

全カリ改革の一つの目玉に、領域別科目群の設定がある。ここでは各学部の教員が、自分の学部以外の学生に、その学部のディシプリンを示す科目を展開するという構想である。領域別にはAとBがあり、とくに領域別Bでは、文献講読的要素も組み入れ可能な講義が展開される予定である。

なぜ文献講読なのか。それには全カリ総合構想・運営チームでの議論がある。「昨今の学生は本を読まなくなったね」、「特にいろんな専門分野の古典に触れる機会が全然ないね」という議論が一昨年の全カリ総合チームの会合の席上でなされた。今回の全カリ改革案はこのときのチームリーダー西原先生のリーダーシップによるものだが、それから1年、チームメンバー全員がいろんなアイデアを持ち寄って、ブレインストーミングをおこなった。現リーダーの平野先生も刺激的（扇動的？）な意見をどんどん出されて、会議はなかなか楽しく、盛り上がった。

私は理学部に所属しているので、自然科学系の科目について、コメントを求められることが多かった。ところで、立教大学の10学部のうち、唯一の自然科学系（理系）学部が理学部であり、全カリの自然科学分野の科目設計をするのに理学部の役割は大きい。それはわかっているのだが、そう簡単にディシプリンを示す科目を作ったり、文献講読的な科目を作れない事情が理学部にはあるのである。

理学部内で領域別B科目の話をしたところ、「自然科学の古典っていったい何だ？」、「アリストテレス？ユークリッド？」、「ニュートンの『プリンキピア』？」、「ダーウィンの『種の起源』？」、「ファラデーの『ろうそくの科学』や寺田寅彦のエッセイもいいのでは？」、「そんなの文系の学生に読ませるの？」、「理学部の学生にこそ読ませたいよな」・・・と、色々と簡単には片付かない話が出てきた。

たしかに自然科学に関する古今の名著はあるのだが、それらが現在、自然科学を学んでいる学生にとって、卒業して、理系の知識を生かした職業に就くのに、必ず読まねばならない書物かというとそういったものではない。むしろこうした古典は科学哲学、科学史の範疇に入ってしまっているので、理学部的には、それを読むというのは文系科目なのである。事実、現状ではこうした講義が置かれている大学の理学部はほとんど存在しない。けれど私は個人的には、理系の学生たちにも、文系の学生たちにも、こうした自然科学の古典を通じて、近代自然科学が発達し、自然界を理解するツールとして人々に受け入れられるようになった流れを学んで欲しいと思っている。宇宙はなぜ発生したのかという問題から、人は何のために生きているのかという問いかけまで、それらに答えを出す（出そうとする）ためにこそ、大学は存在するのであって、そのためにも大学にはもっと哲学的な科目が必要だと思うからである。

理学部の話が長くなったが、この原稿が活字になる頃には各学部の提案が出そろっているだろう。他学部の領域別Bに何が並ぶか、大いに期待している。

２０１０年度　全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

＜言語教育科目構想・運営チーム＞

① 英語教育研究室

・4 月 1 日（木）　新任オリエンテーション
（池）7 号館 7102 教室　11：00～12：00

・4 月 1 日（木）　前期ＦＤセミナー
（池）7 号館 7102 教室　13：00～16：00

・7 月 2 日（金）～15 日（水）　前期カリキュラムアンケート（コースアンケート）実施
実施数：234 クラス

・12 月 4 日（土）　第 11 回大柴杯スピーチコンテスト
（池）14 号館 D502 教室

・12 月 11 日（土）後期ＦＤセミナー
（池）14 号館 D401 教室　13：30～18：00

・12 月 15 日（水）～21 日（火）、1 月 8 日（土）～18 日（火）　後期カリキュラムアンケート（コースアンケート）実施
実施数：234 クラス

・英語ウェブテスト（GTEC）実施
4 月期（プレイスメントテスト）
7 月期（前期末）・1 月期（後期末）

② ドイツ語教育研究室

・7 月 23 日（金）　前期担当者連絡会
（池）11 号館 A201 教室 16：30～18：00

・2 月 18 日（金）　後期担当者連絡会
（池）5 号館 第 1 会議室 16：30～18：00

③ フランス語教育研究室

・6 月 21 日（月）　前期担当者連絡会
（池）太刀川記念館第 1 会議室　17：30～19：30

・12 月 18 日（土）　後期担当者連絡会
（池）太刀川記念館第 1 会議室　15：00～18：00

④ スペイン語教育研究室

・7 月 27 日（火）　前期担当者連絡会
（池）11 号館会議室　18：30～21：00

・1 月 26 日（水）　後期担当者連絡会
（池）11 号館会議室　18：30～20：30

⑤ 中国語教育研究室

・7 月 17 日（土）　前期担当者連絡会
（池）太刀川記念館多目的ホール
15：00～17：30

・同日　FD セミナー

・1 月 29 日（土）　後期担当者連絡会
（池）太刀川記念館多目的ホール
15：00～17：30

・同日　FD セミナー

⑥ 諸言語教育研究室

・4 月 10 日（土）科目担当者新任教員 FD（日本手話）
（池）　9：30～10：30
（新）11：30～12：30

・7 月 22 日（木）前期担当者連絡会（朝鮮語）
（池）11 号館会議室　17：00～19：00

・1 月 26 日（水）後期担当者連絡会（朝鮮語）
（池）ミッチェル館会議室　17：00～19：00

⑦ 日本語教育研究室

・7 月 22 日（木）　前期担当者連絡会
（池）6 号館第 2 会議室　13：00～16：00

・9 月 17 日（金）　後期担当者連絡会
（池）12 号館講師控室　13：00～15：00

・3 月 1 日（火）　後期担当者連絡会
（池）12 号館第 3 会議室 13：00～15：00

・3 月 7 日（月）　後期担当者連絡会
（池）太刀川記念館第 1 会議室
11：00～16：00

・3 月 9 日（水）　後期担当者連絡会
（池）11 号館会議室　10：00～13：00

＜総合教育科目構想・運営チーム＞

・7 月 23 日（金）　2010 年度第 2 回担当者連絡会
（池）11 号館 A203 教室　17：00～19：00

・11 月 26 日（金）2010・2011 年度「立教生の学び方」担当者連絡会（テレビ会議）
（池）12 号館第 1 会議室、（新）キャリアセンター会議室　18：30～19：30

・2 月 25 日（金）　2011 年度第 1 回担当者連絡会
（池）11 号館 A204 教室　17：00～19：00

＜新任教員対象オリエンテーション＞

・4 月 8 日（木）・9 日（金）
人事課主催オリエンテーション
「全カリについて」の説明：青木康全カリ部長
・3 月 31 日（水）
ランゲージセンター主催オリエンテーション
（新任教育講師対象）
青木康全カリ部長・新野守広次期言語教育科目構想・運営チームリーダー出席（予定）

＜授業評価アンケート関連＞

① 言語教育科目構想・運営チーム
【2010 年度「授業評価アンケート」関連】
・全カリ言語教育科目「授業評価アンケート」実施（2010 年度後期科目対象）
12 月 15 日（水）～21 日（火）、1 月 8 日（土）～18 日（火）　実施科目数：255 科目
【「授業評価アンケート報告書」関連】
・全カリ言語教育科目「授業評価アンケート 2009 年度報告書」作成（2011 年 3 月刊行予定）

② 総合教育科目構想・運営チーム
【2009 年度「学生による授業評価アンケート」関連】
・2009 年度「学生による授業評価アンケート」学部等総評の作成
【2010 年度「学生による授業評価アンケート」関連】
・2010 年度「学生による授業評価アンケート」実施
実施科目数：前期 115 科目、後期 114 科目、計 229 科目

＜シンポジウム＞

テーマ：「大学におけるしょうがいしゃ支援～全カリ言語教育の現場から」
日　時：11 月 18 日（木）18：00～20：00
池袋キャンパス太刀川記念館多目的ホール
プログラム：
◆基調講演
石田　久之 氏　国立大学法人　筑波技術大学障害者高等研究支援センター障害者基礎教育研究部（視覚障害系）教授
演 題　「教員の責務としての障害学生修学支援」
◆事例報告
秋山　奈巳 氏　神奈川県立平塚ろう学校教諭
「しょうがいを乗り越える言語学習」
文　珍瑛　本学ランゲージセンター教育講師（朝鮮語）
「しょうがい学生が所属する授業運営」
◆司　会
谷野　典之　本学異文化コミュニケーション学部教授、全学共通カリキュラム運営センター言語教育科目構想・運営チームリーダー
＊本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム第 16 号」に掲載（予定）

＜学外対応＞

・10 月 27 日（水）　名桜大学教養教育センター設置準備委員会来学
「全カリのカリキュラムおよび組織運営」
・11 月 8 日（月）　日本女子大学来学
「全カリ言語教育カリキュラムおよび組織運営」
・11 月 29 日（月）　筑波大学外国語センター来学
「全カリ言語教育カリキュラム」
・12 月 8 日（水）　帝塚山大学全学共通教育センター来学
「全カリのカリキュラムおよび組織運営」

＜学会・シンポジウム参加＞

・6 月 5 日（土）・6 日（日）
大学教育学会第 32 回大会「大学の存在意義（レゾンデートル）」（愛媛大学開催）参加
青木康全カリ部長・林英明全カリ事務室課員

全カリニュースレター　No.29
印　刷　2011. 2. 25　発　行　2011. 3. 1
発行人　青木　康
編集人　浜崎　桂子、岩崎　俊夫
発行所　立教大学
全学共通カリキュラム運営センター
印　刷　神谷印刷株式会社